

優秀賞

## 日常と感動

岩手県 盛岡市立高等学校二年 山口 有稀音

「感動とは何だろう」と考えた。映画を見て涙を流す、すばらしい風景を見て鳥肌が立つ、一所懸命練習に励みライバルチームに勝ち、仲間と涙する。確かにそれらは感動と言えるだろう。しかし、そのような非日常の中にも感動があるわけではなく、もっと身近な日常にも感動はいくらかもあるのだ。そのことを、東日本大震災は教えてくれた。これからその身近な感動について書いてみたい。

私は岩手県岩泉町の小本地区の出身で、小学五年生の時に東日本大震災を経験した。私の家は個人商店を営んでいたが、店も家も流されてしまった。小学生だった私にはとても大きな出来事で、現実を受けとめるまで時間がかかった。家が流され、帰る場所が無い私達一家は、避難所で三ヶ月間生活をした。その後、仮設住宅に住み始めた。仮設とはいうものの、自分の家があるという安心感に幸せを感じた。また、私の通う小学校、中学校も津波の被害に遭ったため、私達は仮設校舎での学校生活を送ることになったが、部活動や授業は不便なことがた

くさんあった。例えば、体育館を小中一緒に使うため、決まった時にしか体育館で遊べなかった。部活動でも小中で体育館を分けて使うため、大好きなバレーボールに打ち込めず、常に不完全燃焼で終わっていた。だが、親元を離れて進学した今は思う存分練習ができる。この練習したい時にできることがどれだけ幸せなのかを改めて感じるができる。大震災は辛い経験だったが、その事があったから大好きなことに打ち込める環境に感謝することができるようになった。この気持ちを絶対に忘れないことが、支援してくださった方々への恩返しになると思う。

震災から四年目、中学三年生になった私は、進路に迷っている時期があった。バレーボールを続けるかどうかも迷っていた。そんな時に背中を押してくれたのは両親だった。両親からは、

「お金のことは気にしないで、自分が一生懸命になれる三年間を送れる道を選びなさい。後悔することのないようにね。」

と言われ、私は進路を決めることができた。そして、大好きなことを一生懸命打ち込む三年間にするため、岩手県内でも強豪校である盛岡市立高校に入学することを決意した。私は地元を離れ、親元からも離れて下宿生活を送ることになった。入学当初は不安でいっぱいだった。なぜならば親と一緒に住んでいるときは家事などすることはほとんどなく、炊事や洗濯などをしたことがなかったからだ。身の回りのことを自分でできるか不安で一杯だった。また、知っている人が全くいない中で、うまく過ごしていけるのか、随分悩んだ。

今、下宿生活を続けていると、ふと母の作る料理が食べたくなくなるときがある。下宿に来る前は、

「今日何食べたい？」

「肉がいい!!」

というやりとりが多く、母の用意してくれた食事を食べられたが、今では食べたい食事も我慢することが多くなった。休みの日に実家に帰ると、親と一緒にご飯を食べられる幸せ、母の料理を食べられる幸せを感じた。また、家族との他愛のない会話が、とても安心と幸せを与えてくれるものだと知った。

感動とはどういうものか。私は、日常生活の中を観察すれば、いくらでも感動することはある、と言いたい。それを東日本大震災が気付かせてくれた。当たり前のことが当たり前前に行える幸せ。その一つ一つに感動がある

のだ。この感動は震災を経験した私たちだからこそ感じることができると感動なのである。大好きなことに打ち込める幸せ、周りの人に支えてもらっている幸せ、生きている幸せ、たくさんの人に出会えた幸せ、たくさんの当たり前に思っていることこそが幸せであると私は感じた。確かに、映画を見て涙を流したり、すばらしい風景を見て鳥肌が立つような感動とは違うかもしれない。私も、もしかしたら大震災に遭わなければ、このことに一生気付かなかったかも知れない。だから私はこの感動に気付く心を忘れずに過ごしたい。たくさん支えがあって私があること、その支えに感謝の気持ちを持たないこと。これからも日常生活の中での感動を見つけられるような感受性を失わずに生きていきたい。

